



2025年（令和7年）
8月号（No. 963）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

ペテガリ西沢からペテガリ岳を越え バックラフトで歴舟川を下る

飯田幹太

「バックラフト」という、ザックに収納できるサイズの小型ゴムボートを背負ってペテガリ西沢を遡行しペテガリ岳に登頂。山頂から66km、キムクシユベツ川の連続する函を突破し、清流歴舟川を漕ぎ下って太平洋に至った「川を巡る山行」。昨年8月に行なわれた、北大山岳部の若手OB3名によるユニークな山行記。

ペテガリ山荘から西沢へ

1日目（曇り）…神威山荘駐車場
（14:30）～ペテガリ山荘（17:00）
〓C1

入山日。相方の水野就を札幌まで迎えに行き、昼過ぎに登山口である神威山荘に到着。ここからペテガリ山荘までは通称「ベッピリガイ乗越」と呼ばれ、ペテガリ岳登山のアプローチ道だ。道といって

も小さい沢型に踏み跡がついただけで、久しぶりの重荷と暑さが身に堪える。

2時間ほどでペテガリ山荘に到着、重荷を放り投げ、河原へ釣りが出る。ほどよいサイズのニジマスと、3尾ずつ確保し、各自焚火で焼いて食べる。

2日目（曇り）…C1（9:30）～染退橋（10:00～12:30）～ペテガリ西沢出合（15:00）〓C2

目次

ペテガリ西沢からペテガリ岳を越え バックラフトで歴舟川を下る ……	1
令和7・8年度 新役員紹介 ……	4
支部長が代りました ……	6
追悼 ……	7
支部特別事業補助金を受けて 「房総の山復興プロジェクト」を推進 ……	8
山の名著再読 ……	10
東西南北 ……	12
図書紹介 ……	13
新入会員 ……	14
図書受入報告 ……	14
会務報告 ……	16
ルーム日誌 ……	17
会員異動 ……	17
INFORMATION ……	17
編集後記 ……	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

この日はペテガリ西沢出合までの行程。昨日に引き続き大した行動予定ではないので、遅めの起床。ペテガリ山荘から少し行った所にある人工池「東の沢調整池」で、後半戦の川下りパートに向けたバックラフトの練習をする。川下りは、水野はこれが初めて、飯田も3回目。

サッシビチャリ川を少し遡り、ペテガリ西沢出合へ。途中、足の着かない函（廊下状地形）があったが、この日は暑かったので泳いで突破する。ペテガリ西沢出合の快適な砂利地に幕営。この日もタープの下で、日中釣ったニジマスと焚火を楽しむ。明日への興奮と不安を抱えつつ眠る静かな夜だった。

西沢は直登不能な函滝と



ペテガリ西沢で最初に現われた滝。左岸からシビアな高巻きで越える

シビアな高巻きの連続

3日目（曇り）…C2（5:30）～ペテガリ岳（18:00～18:30）～標



キムクシュベツ川上部の函滝。飛び込んで泳ぐ

高約1400m・Bカール手前
(20:00)〓C3

いよいよペテガリ西沢を遡行開始。出合からすぐに函状となり、嫌でも緊張感に包まれる。序盤は屈曲のたびに登れない函滝が連続し、シビアな高巻きの繰り返しが要求される。最初の滝は左岸のルンゼから高巻き。飯田がいったん空身で登ってザイルをフィックスして戻り、再びザックを背負って2人で登り返す。次の滝も直登は不可能、右岸の灌木帯に一度突っ込ん



歴舟川序盤の核心部。ポータージセずに突っ込む

で、少しトラバースしてから懸垂下降で沢中に戻る。

その後も直登できない滝が連続。滝のすぐ横を悪いクライミングで一段登り、悪いトラバースで沢中に復帰するといった対処が続く。覚えきれなかったが7、8回はザイルを使ったと思う。正しいのか分からない高巻きを続け、この先に何があるのか、すでに核心部は越えたのか、はたまたまだ先なのか、という不安に苛まれながら黙々と遡行を続けていく。

終盤に近付くと沢は開けて水量も減ってくるが、その分傾斜がきつくなり、もはや「沢そのものが滝」とも言えるほど延々と滝が続く。当然、中には素直に登れない滝もあり、もう2人とも全身ヨレヨレ。最後に締めめのヤブこぎを30分ほどこなしてペテガリ岳に至る。少々甘く見ていた分辛かったが、内容としては大満足、三ツ星の沢だった。後半の日程で合流する神谷宙に連絡を入れ、風の強いピークをそそくさと後にして十勝側への下降を開始、ペテガリCカールを目指す。

歩き出して1時間ほどで水が流れている場所があったので、一晩分の炊事と飲み水を汲む。最後はヘッドライトつけて急斜面を転がり落ちるように降りたが、結局Cカールにはたどり着けず、畳2畳ほどのスペースで妥協、力尽きてC3とする。その日、上札内地区で開催された花火大会まで見えるという、嬉しいサプライズも。

ペテガリ岳を越え

キムクシュベツ川を下る

4日目(曇りのち霧雨)…C3
(6:00)〜キムクシュベツ川三股

(8:30)〜歴舟川合流地点(15:30)〜ややよい沢出合(18:00)〓C4
早朝、下半身のあまりの疲労感に目が覚める。起きると眼下に朝焼けの十勝平野とペテガリCカールが広がっている。火を熾し朝飯をとっていざ出発。カールからしばらく降りると再び水がちよろちよろと流れ出す。これを海までたどるなんて、まさにロマンだ。

キムクシュベツ川(国土地理院地図ではマオロマップ川)の序盤、三股までは苔の生えた急傾斜の滑滝が延々と続き、緊張の時間が続く。ひたすら沢の左右のブッシュをつかんで下降していく。山頂からここまでたった2km程度の距離だが、標高1736mのうち1000mも下ってしまった。改めてすごい傾斜だ。三股で「ふう」とひと息入れ、いよいよキムクシュの核心、ゴルジュ区間へ。

どんどこどんどこ狭いゴルジュを降りていく。飛び込んだりへつたり。長い函が出てくるたびにザックが水を吸って重くなるうえ、冷たい水に体力を吸い取られるので、当然、後半になるほど全身がヨレる。もう勘弁してほしい、と



大樹の街まで降りてくるとフィナーレは近い(大樹橋にて)

いうところによくやく歴舟川本流と合流。水野はかなり疲労した様子である。

歴舟川を少し下った快適そうな河原でC4とする。テントサイトを探している途中、若いヒゲマと遭遇したが、向こうからすぐに去ってくれた。タープの下で焚火をしながら神谷を待つ。暗くなってきたり不安になったところに声が聞こえ、大量の酒とつまみを担いだ神谷が登場。いっぱい飲んで話して幸せな夜だった。

バックラフトで歴舟川を下る

5日目(曇りのち霧雨)・C4(8:00)→ゴルジュを抜けた大きな中洲(16:00)→C5

二日酔いで朝を迎える。焚火で朝飯を炊きながら各自、川モードへ身の周りを固める。3艇のパックラフトを膨らませ、いよいよ川下りへ。序盤は沢の延長といった感じで、沢歩きには広過ぎるが川下りには狭過ぎて、どっちにしても難しい微妙な溪相^{けいそう}。背負っているのも癪なのでとりあえず舟に乗る。明らかにヤバそうな雰囲気^{きふう}の所はポーテージするが、多少難しそうな所もほとんどん突つ込む。全くの川下り初心者3人でやっていることではなさそうな雰囲気だが、案外沢登りと同じ要領で対処していける。誰ひとり何が正解なのかを知らないが、なんとか無事に下っていけるのは、これまで沢登りを真面目にやってきたお陰だろう。段差や函が連続するが、バックラフトは安定性があり、そう簡単にひっくり返ることはない。徐々に橋や堰堤が出てくるようになる。進捗が分かって嬉しい。夕方、ゴルジュが終わり、牧場

のにおいがして、山から出てきたことを感じる所に、ここで寝ると言わんばかりの大きな中洲が。みんなにつこり、ここをテントサイトに決定する。結局この日も最後までゴルジュが続く、一日中緊張感のある行程だった。どこが疲れたというわけではないのに、なんとなく全身が疲れている不思議な感覚。もちろん、先が読めないことからくる精神的疲労が一番大きかったが。ま、我々は焚火ができればなんでもOKなのである。

6日目(曇り)・C5(7:30)→歴舟川河口(13:30)

最終日、いよいよ太平洋まで。最終日くらいのはびり下れるかと思っていたが、流れが強くなった分、あまりそんな感じではない。しかし景色は開け、そこを流れているものは気がつけば完全に川。沢と川の境はどこなのだろうか、何が決め手となるのだろうか(なんて問いを考える余裕は、本当に最後の最後になるまでなかったが)。

中の川とヌビナイ川がほぼ同時に合流した所でこの日1回目の休憩。疲労と寒さのせいか震える水野と飯田。釣りをする人の姿や道路を走る車もぼつぼつと視界に入

るようになり、いよいよ下界の雰囲気が出てくる。大樹^{たいき}の街に近づくにつれ、日本一の清流・歴舟川にもさすがに人工物が現われた。大樹橋で2度目の休憩をとる。

ここからが本山のハイライトと言ってもいい内容だった。再び街や人の気配が遠ざかり、ありのままの原野とそこを蛇行する川が広がる。瀬は最後まで続いていく。時折現われるシカやオジロワシ。随分と広くなった空をすがすがしい気分で見ながら下っていく。数日前に越えた山並みは、気がつけばはるか後ろ。そして、正面に広がる原野の切れ目の存在に気づいたとき、波の音が聞こえ、川も僕たちも海へとたどり着いていた。

＊

西沢遯行は序章ではなく、キムクシユベツ川下降もつなぎではない。歴舟川下りも延長戦ではない。全てがあつて美しい一筋の流れだった。「川」と「移動」ということの本質的なつながりを、全身で感じた旅だった。

これからも、こんなマジメで不真面目な遊びを続けていきたい。(北海道大学山岳部OB、北大山の会員)

令和7・8年度 新役員紹介

先ごろの総会を経て新たに就任された役員の皆さんに自己紹介をしていただきます。①会員番号 ②役職 ③担当委員会やPT、WGなど ④好きな山域や登山スタイルなど

柏澄子(かしわ・すみこ)

①13088 ②副会長 ③総務委員会、記念事業委員会、広報委員会、支部事業委員会、海外登山助成委員会 ④自然の中で行なう活動全て。

これまで「山」編集人、総務担当常務理事を務めました。正直、目の前のことに精一杯だった時期もあります。けれど、会員の方々の多くの貴重な出会いのなかで学ぶことが多く、少しずつ先を見ることができるようになったと思います。まずは創立120周年を良い形で終え、次世代へとつなぐこと。長年の課題である資金と人材不足を改善する。これは極めて難しい課題ですが、見通しを立てることを目標したいと思います。

抱負はこれまでと変わりません。本会が持つ歴史と実力を、現代的な試みや若い登山者たちの活動と融合させることが重要と考えます。今期は会長をはじめ4人の女性理事が在籍します。「山」編集人の

最後の仕事は、故大久保春美・副会長とYOUTH CLUBの女性会員たちの座談会でした。当時から10年近くたちます。全ての会員が気持ち良く会の活動が行なえるよう、尽力したいと思います。ご指導ご協力のほど、お願い申し上げます。

荒川一郎(あらかわ・いちろう)
①12984 ②常務理事 ③学生部委員会、YOUTH CLUB委員会、科学委員会 ④山の中に「居る」ことを好みます。仲間とのにぎやかな山行、独りテント泊、どちらも好きです。山登りは高校生のときに始めました。縦走に始まり、沢登り、山スキーなど、岩登りも少々。山に行くときはもっぱらテント泊で行くときはもっぱらテント泊で行く。大学生時代には乗鞍岳中腹にある山小屋「Hittenleben」も楽しみました。大学に職を得てから、山岳部の部長(顧問教員)を32年半務め、その間の現役山岳部員やOB、

OGとの山行が山歴の多くを占めています。大学山岳部のJAC学生部での活動を見ているうちに、自分もJACに入るべきと考えようになり1999年に入会しました。しかし、本業が忙しい間はJACの活動にはあまり参加できませんでした。退職して、さあ山に行くぞとJACに顔を出すようになったところ、大学での経験を見込まれたのか、学生部やYOUTH CLUBの担当を仰せつかった次第です。若い人たちがより活躍できる、より活躍しやすい山岳会を目指して工夫・努力いたします。

吉田雅子(よしだ・のりこ)
①11091 ②理事 ③資料映像委員会、図書委員会 ④ハイキング、縦走、岩、雪、沢、どれも好きです。登っていない山はどこでも行きたいですが、出身地の山梨の山はできる限り登りたいです。海外の山にもできる限り登って、自分の経験高度を上げたいです。

山国育ちで幼少時から山に親しみ、高校、大学でも山のクラブで活動しました。学生のころは会員外ゲストとしてJACに参加させていただき、社会人になった年に入会しました。若輩で入会したので、JACでは山のことばかりでなく、大人としての振る舞い方や組織のあり方というものを学んできたと思っています。特に先輩諸姉から学んだことは多く、結婚後も、母親になっても大きく支えていただいたことに深く感謝しています。まさかの理事就任ですが、理事としてもいろいろなことを学びながら、充実したクラブライフを送りたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

梅田直美(うめだ・なおみ)

①16164 ②理事 ③支部事業委員会、山岳研究所運営委員会、公益法人運営委員会 ④

岐阜に住んでいるので白山や御嶽山が好きで毎年何回も登っています。ライチョウに会える山、眺望の良いアルプスも好きです。人が少なく静かな山に癒されます。この半年は熊野古道や大峯奥駈道などの古道を集中して歩き、そのときの風景を思い出してはうっとりしています。

現在、岐阜支部の事務局長を務めております。このたび理事にご推薦いただき大変驚きましたが、地方在住の女性の理事を増やしたいとのことでしたので、微力ながら大役をお引き受けすることとなりました。

日本山岳会に入会して、山頂を目指す登山だけではなく、歴史ある古道を歩くこと、自然保護活動山の文化に触れることなど様々な楽しみ方があることを知りました。また、全国に支部があり、横のつながりを通じて山の楽しみ方がさらに広がりました。

近年、会員数の減少が問題視されていますが、全国各地の支部が活発に活動することにより、日本山岳会の活性化と会員増加につながるのではないかと考えております。どうぞよろしく願っています。

根本勇哉(ねもと・ゆうや)

①16490 ②理事 ③広報委員会、DM委員会、会報編集委員会 ④小川山、瑞牆山、六甲山

このたび初めて理事を拝命いたしました。2019年に入会し、昨

年、2024年より広報委員会とデジタルメディア委員会に所属しております。

山に触れたきっかけは、高校の修学旅行での利尻山登山。駆け回るように楽しんだ記憶があります。社会人になり継続的に登山をするようになって、30歳を境に仕事を辞め、アルバイトを転々としながら山や岩に登る日々を送りました。現在は、縁あってアウトドア用品メーカーに勤務しております。一方で生活環境も変わり、少ない時間ながら近場の低山や海など身近な自然を楽しんでいます。

日本山岳会で新しく制定されたスローガン「みんなの日本山岳会」これを担当理事として実現するに当たっては、情報を届ける方々の顔を思い浮かべながら、人と人をつなぐ手段としてデジタル化を進めたいと考えています。どうぞよろしく願っています。

大塚哲生(おおつか・てつお)

①16931 ②理事 ③広報委員会、自然保護委員会、国土地理院WG ④どの山も大好きですが、現在は裏高尾山系の森林の手入れに専念しています。

初めての理事就任です。高校・大学とワンダーフォーゲル部に所属していました。結婚後は山から遠ざかっていましたが、2011年に大学時代のワングルの同期および先輩から高尾の森づくりの会に誘われ、山への恩返しのため参加しました。

2022年からは、高尾の森づくりの会の代表を務めています。高尾の森づくりの会は、針広混交の多様性に富む森づくりを行っており、参加メンバーにも恵まれ、とても楽しく活動しています。

ところで、本会と高尾の森づくりの会は、以下の点において状況が類似しています。

(1)構成員が減少傾向にある。
(2)赤字決算となっている。
私としては、この2点に対処しつつ、本会と森づくりの会が今後とも息の長い活動を目指せるように、わずかながらもお力添えできれば幸いです。

片山進平(かたやま・しんぺい)

①17371 ②理事 ③財務委員会、YOUTH CLUB ④雲海を見ることができる山、日帰りできる低山、軽

い荷物で気軽に行け、景色が美しい山。

今年度、財務担当理事という大役を拝命いたしました。右も左も分からぬ状況ではありますが、諸先輩方にご指導を仰ぎながら、無事に任期を全うできるよう努めてまいります。

山に関しては全くの初心者で、昨年8月に、高尾山に登ったのが初めての登山体験でした。それまでは自転車趣味としており、ロングライドやロードレース、ヒルクライムレースなどにも参加していました。

しかし、昨年6月に脊柱管狭窄症の手術(固定術)を受けた結果、自転車に乗れなくなってしまう、友人の勧めで登山を始めた次第です。山に関する正しい知識を身に付けたいと思い、同年9月から公益社団法人日本山岳会の初級者講習に参加しております。いつか皆様の山行にご一緒させていただく際にご迷惑をお掛けしないよう、少しずつ経験を積んでいるところです。どうぞよろしく願っています。

武川俊二(たけかわ・しゅんじ)

①なし ②外部理事 ③国際委員

員会、広報委員会 ④新潟県糸

魚川市の南東部、海川源流域の

海谷山塊。未開の山域として登

山の技術、知識の多くをここで

学びました。ほかに気に入って

いる山域は北アルプス北部山域、

穂高岳周辺、甲斐駒ヶ岳周辺な

どがあります。かつては積雪期

登攀に傾注、年代とともに山野

逍遙に変わってきています。

外部理事として日本山岳会に参

加いたしました。現在、公益社団

法人日本山岳ガイド協会の理事長

を務めています。

登山の始まりは、高校生のころ

からです。良き先輩方に連れて行

かれたのが長く続いている秘訣で

す。山岳雑誌の編集を経験したの

ち、山岳専門旅行社を起業し、ガ

イドとしての活動歴は三十年余を

経ています。ただ、残念ながら日

本百名山の達成はできていません

ちなみに谷川岳や北岳、甲斐駒ヶ

岳、穂高岳、剣岳などは、それ

ぞれ100回以上登っているかと思

います。

取り組む課題は、次世代、次々

世代に登山の魅力、山歩きの楽し

さ、自然に接する喜びをいかにして継承していくかであり、これは、山の楽しさを教えてくれた先達や先輩諸兄への恩返しであると考えています。

額賀直樹(ぬかが・なおき)

①なし ②外部監事 ③会計監

査・業務監査 ④初心者向けの

山。

本年4月からの公益法人制度改

正を受けた外部監事として本会の

監事を拝命いたしました。これま

で公認会計士として、企業の会計

監査や業務監査、企業間のM&A

支援など経験してまいりました。

これまでの企業会計・財務に関す

る知見を活かし、本会の健全な運

営に微力ながら貢献できればと存

じます。

登山は初心者ではありませんが、

今回のご縁を機に山の魅力に触れ、

人生を楽しむ趣味の一つとなるよ

う関わっていただければ、と思っ

ております。どうぞよろしく願い

いたします。

支部長が代りました

山陰支部長 伊澤寿高さん

75歳になり、体力に似合った地

元の低山に親しんでおります。ま

だ現役で仕事をしているものです

から、職務を若い職員に積極的に

譲って職務を減らし、車中泊しな

がら日程はあまり決めず、心を開

放して2〜4泊の旅を楽しんでお

ります。

私は、4代の支部長の下で10年

以上、事務局長を務めましたがお

願ひして辞退させていただきました

た。しかしながら、役員をする会

員も限られているため会計として

執行部に残っていました。前任

の白根支部長から指名され、断り

切れず支部長に就任することとな

りました。

山陰支部は今年で創立75年にな

りますが、会員の平均年齢80歳と

高く、亡くなられる会員が新入会

員より多いのが実情です。私の町

でも、小学校入学者数より75歳か

らの敬老会入会者数がかかるかに多

い現状があります。将来の支部を

考えるに、このままでは、若い新

入会員が10名ほど入らない限り、

10年先は解散するしかないのでは、

と危惧しております。

鳥取・島根県は確実に過疎が進

行しています。今後、山陰支部の

存在を続けるためには、先々関西

支部、四国支部のように、道州制

の中国支部創立により山陰部とし

て生き残るしか道はないのかと思

う日々です。職場の若い男女を登

山に連れてともに山歩きの楽しみ

折を見て日本山岳会の話をしませ

が、なかなか入会までには及びま

せん。今後も引き続き、若い馬力

のある新人勧誘に努めてまいりま

す。

本部、支部の皆様にはご迷惑を

お掛けするかと思いますが、よろ

しくお願い申し上げます。



山陰支部長 伊澤寿高さん

追

OBITUARY

悼

伊藤久次郎元支部長を偲んで

関口興洋

令和7年4月6日(日)、午前9時

半ごろ、伊藤さんの奥様から、伊藤さんが4月2日にご自宅で亡くなられ、葬儀も家族葬で執り行なったのお知らせをいただきました。あまりにも突然な知らせで気が動転し、お悔やみの言葉に窮した次第です。

昨年11月以来、入院生活が長引いて体力が衰え、歩行困難になったとのことで心配していましたが、

コロナ禍など昨今の状況下ではお見舞いに行きたくても全く叶わず、最後のお別れもできず、誠に残念で痛恨の極みです。

伊藤さんとは、北九州支部創立2年後(2002年9月)の総会とともに役員に選出され、それ以来、伊藤さんは広報担当として同年10月発行の支部報「北九だより8号」から12年7月発行の61号まで10年間、編集人として活躍されました。11年4月、支部長に就任、16年5月、体調悪化により支部長を退任されましたが、それまで支部の運

営・発展のために尽力していただいたことに、改めて感謝申し上げます。

全国支部懇談会や他支部の周年記念行事、上高地や高千穂のウェストン祭などの催事、さらに年次晩餐会など機会あるごとに一緒に出かけると、伊藤さんはいつも、こまめにビデオ撮影を行ない、そのときどきの貴重な記録を収録し、最後にはDVDに編集されていました。

支部の様々な行事にも常に積極的に参加され、貴重な映像を残されました。たとえば、園川陽造・永年会員が講師を務めた、皿倉山での「山岳技術専科」の内容を的確に映像化した成果がDVDに収録され、シリーズとして12巻制作されました。これらは今後、新人研修の場で頻繁に活用していただきたいもの。それが伊藤さんに対する一番の供養です。

そのほか伊藤さんのもう一つの特技は、年季の入った木版画制作です。棟方志功の孫弟子と称していました。1987年、郵政局主催の賀状コンクールでの特選受賞を機に研鑽に励み、2002年第98回太平洋展に「峠の山小屋(徳本峠)」を出展、会員推挙。18年

第68回日本版画院に出展、同人会員に推挙されるなど、全国的にも高い評価を受けております。

支部長退任後、毎日会館のルームで版画教室を主宰し、支部の会員・会友や一般の希望者を相手に精魂を傾け指導されていた姿が懐かしく思い出されます。これらは、公益社団法人の文化活動としても評価されると信じています。

日本山岳会創立100周年の記念事業として発案された「中央分水嶺踏査」で、北九州支部の担当は、山口県と島根県境の仏峠より福岡県の平尾台の吹上峠まで220kmでした。04年4月11日、仏峠をスタートし05年5月8日、吹上峠で完結しました。踏査の貴重な記録は『踏みあと』に収められていますが、編集長として複雑な編集作業を統括したのが伊藤さん(当時、副支部長でした)。

お酒が大好きだった久さんの洒落を引用し、お別れの挨拶いたします。永い間、お付き合いをいただき誠にありがとうございました。安らかに休みください。《秋の夜の、酒はしづかに飲むべかりけり 僕醉(伊藤Q)》合掌

(北九州支部会員)



伊藤 久次郎(いとう・きゅうじろう)

会員番号13499

1940年1月 福岡県田川市で出生

1964年 福岡大学法学部を卒業のち福岡県警察官を拝命

2000年 福岡県警察官を定年退職。日本山岳会北九州支部設立に伴い入会

2010年6月 長次郎谷から剣岳登頂、平蔵谷下降(70歳)

2011年8月 ドロミテ最高峰マルモラーダ登頂(71歳)。瑞宝単光章を受章

2020年 傘寿記念として『木版画集・青春の思い出』を出版

2025年4月2日 逝去、享年85

REPORT

支部特別事業補助金を受けて
「房総の山復興プロジェクト」を推進

台風災害後、遭難が多発

2019年、千葉県を襲った台風15号と19号は、房総半島に甚大な被害をもたらした。飛ばされた屋根瓦の応急処置として、ブルーシートを張った家屋の報道映像を覚えておられる方も多いだろう。荒れ狂った暴風は房総の山々の大木をなぎ倒し、登山道にも壊滅的な被害をもたらした。

千葉県の最高峰はわずか408mの愛宕山である。『低山王国』であるがゆえにほかでは見られない特異な地形と植生を持ち、毛細血管のように縦横無尽に走っている支尾根は複雑で、ルートを見失いやすい。だが、展望の良い尾根に出れば、幾重にも連なった山々の向こうに富士山がひよつこりと顔を見せてくれる。千葉の山と富士山が海を越えてつながっているのを実感する瞬間は、何ものにも代えがたい喜びだ。

特異な房総の山の自然を求め、

千葉支部 松田宏也

週末には多くの登山者が集まる。台風後も多くの登山者が訪れたが、倒木と土砂崩れで登山道の姿が一変、道迷いと滑落による遭難が多発することになった。このまま放置するわけにはいかぬ、荒れた登山道をなんとかせねば、と県内の主要山岳団体（千葉県山岳・スポーツクライミング協会、千葉県勤労者山岳会、日本山岳会千葉支部の3団体）が集まり「房総の山復興プロジェクト」を結成し、登山道整備に取り組みることになった。

しかしながら、夏場は猛暑とヤマヒルの襲撃のため、冬を迎えるころからが活動シーズンとなる。さらに20年からの新型コロナウイルスによる緊急事態宣言により、整備活動はいったん中断せざるを得なかった。コロナ禍の終息化とともにようやく本格的な整備活動を開始、22年末から25年4月末までに実施した整備は計28回、延べ136名の千葉支部会員が登山道の復興に取り組んだ。

登山道のありがたみを痛感

以下は、参加したメンバーから寄せられた登山道復興への想い。

《登山道を整備するにしても、どこから手を付ければいいのか分からなかった。倒木といえども、地権者や地元に対して勝手に切るわけにはいかない。どういう手続きが要るのか、そこからのスタートだった。山岳3団体での共同作業でノウハウを知り、同時に交友関係も広がった。私にはそれが復興プロジェクト一番の収穫だった。》

房総の山は、低山ゆえファミリーや初心者が多く、そういう層が安心して歩けるように、と整備を心掛けている。一方で、「台風災害も自然の一部ではないか。復旧するにしても自然に手を加えるのは最小限に留めておくべき」と思っている。赤テープだらけの登山道では興奮する。倒木の除去や崩壊地の復旧は安全のために必要だが、その加減がとても難しい。

19年の台風からもうじき6年。そのときの倒木が腐り、道を塞いだりする。始めた以上、登山道を守るという視点を持って地元の山を歩きたい。（三田博支部長）



元清澄山では大木と標識が根こそぎ横倒し

《道具を揃え活動が始まると、たくさんの方がチェンソーや鋸などを手に次々と倒木を撤去し、道を拓いていきました。NHKラジオ「山カフェ」でお馴染みの石丸謙二郎さんが何度も駆けつけ、見事なチェンソー捌きで次々と倒木を処理する姿に、私たちも励まされました。》

登山道が崩落し、滑落死亡事故が発生した鎌倉古道の現場は、尾根の反対側にステップを切り、トラロープを張って迂回路を造りました。幾重にも折り重なる倒木で、道迷い遭難の起きた「房州アルプス」では、道を整備し、ピンクテ



石丸謙二郎さんもチェーンソーを駆使して大活躍

地域住民の参加と協力に感謝

《房総半島の登山道の先には石仏が安置され、何百年も前から豊か

プと道標を設置しました。
復興の努力が実を結び、24年2月に千葉県として初の「全国登山大会」が開催され、多数の参加者に房総の山を楽しんでもらうことができ、報われたと思います。私たちは、今までいくつもの登山道を当たり前のように歩いてきましたが、当たり前のように歩けることがどんなにありがたいことか、このプロジェクトに参加して初めて分かりました。（斎藤米造会員）》

な自然と人々の営みにより里山として保護されてきたことがうかがい知れる。生活に必要な道として地域住民により維持管理されてきた道である。道程の先には石仏が安置され、最高点には祠が祭られている。「鎮守の森」が形成され、水源が確保され、里山として維持されてきたことが分かる。

甚大な被害をもたらした台風の後、雑草に覆われ、枯れ木や倒木で覆われた登山道を、熊手で枯れ葉を払い、倒木をチェーンソーで切断し、崩落地では高回りの道を造って進む整備は、大変であった。房総の低山でもこのありさまだから、山岳地域の登山道の整備はさぞや大変なことと思う。鎌倉古道の整備では、地域住民の積極的な参加と協力があり立派な修復ができた。整備終了後には、住民が丹精込めて作った新米をいただいたこともあった。地域住民の生活に定着した登山道であることを改めて実感した。地域の多くの人々の手により整備され、維持されてきていることに感謝し、今後も楽しく安全な登山を続けたい。（山崎完治会員）》

参加したメンバーからは、「改

めて登山道のありがたさが身にしみた」との言葉を多く耳にした。登山道は、陰で整備に当たっている人がいるから登山者は山の喜びを享受できるのだ、ということを我々は忘れてしまっていたようだ。コロナ禍が終息し、整備活動が本格化した22年には、「房総の山復興プロジェクト」活動を多くの県民に知ってもらうべく、8月11日の山の日イベントとして、プロアドベンチャーレーサーの田中陽希氏の講演会を開催、その場を借りて同プロジェクトにおける登山道整備状況の紹介を行なった。猛暑の中、ありがたいことに約640人もの聴衆を集め、大成功となった。「房総の山復興プロジェクト」で集まった山岳3団体が、一致団結した結果の賜物だった。

なしの車で遭難に気づいたものの、救助に行こうにもどこに登ったかが分からなかった経験があったからだ。
「復興プロジェクト」の活動でようやく登山道が安全に歩けるようになってきたものの、これからも自然の猛威の前では、毎年の補修が必要不可欠になることは間違いない。我々は登山道があることの喜びと感謝を忘れず、この活動を継続していきたい。

なお、我々の登山道整備の活動記録を斎藤会員が編集しYouTubeで公開しているのでぜひご覧ください。YouTube「房総の山復興プロジェクト」で検索してください。

（支部事業委員会委員長、前千葉支部長）



住民により登山口に設置された掲示板

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(47)『遠い山 近い山』

(望月達夫著・茗溪堂)

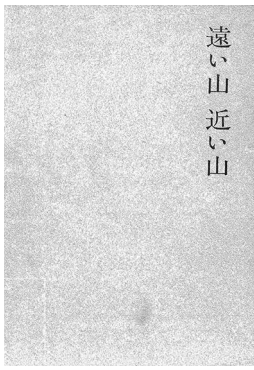
木根康行

望月達夫氏は、日本山岳会副会長を4年、『山岳』の編集を23年間務められ、会報「山」にも数多くの図書紹介等を執筆されているが、本書が最初の執筆本である。

鳴り物入りの海外登山や著名山岳の紀行ではなく、俗受けしない静かなる山や峠の遍歴が、事実を忠実に、装飾を排した分かりやすい簡潔な文体で綴られている。

望月氏は、東京商大(現・一橋大)を卒業後、召集を受けキスカ島に従軍、奇跡のキスカ島撤退作戦で無事に北千島に逃れたが、終戦後にソ連の捕虜となり、南樺太で通訳やソ連軍将校に英語を教えた

遠い山 近い山



昭和43 (1968) 年初版発行

経歴の持ち主である。信託銀行に勤務、のちに証券会社の副社長や投信委託会社の社長・会長などを務めた経営者でもある。

ヒマラヤ研究にも造詣が深く、J・ハントの『エベレスト登頂』やP・パウアーの『カンチエンジュンガをめざして』など6冊の訳書(共訳)も残されており、本会図書室には望月氏が戦前から収集されてきた洋書が寄贈され、「望月達夫文庫」として収蔵されている。

私が望月氏のお名前を初めてお聞きしたのは、私自身が「南会津山の会」に入会してからであった。望月氏は川崎精雄さんの紹介で1968年に入会しており、2002年に88歳で亡くなられるまでに南会津のほとんどの山に足跡を残され、紀行も数多く執筆された。

私は2012年の入会なので、残念ながら望月氏が亡くなられて10年が経過しており、お目にかか

ったことはない。しかしながら、私の山の師匠に当たる山田哲郎氏から『遠い山 近い山』の特装本をいただいて読むように勧められてから、望月氏の著書に惹かれ読み入るようになった。ちなみに、いただいた本は望月氏から山田氏への贈呈本で、達筆で丁寧な贈呈文が添えられており、氏の几帳面な人柄が偲ばれる。

本書は、34編の1950、60年代の山や峠の紀行から成るが、半数は転勤で札幌に赴任した3年間に登った「遠い山」、すなわち北海道の山。札幌周辺の低山やウヰベサンケヌプリ、雄阿寒岳、余市岳、狩場山、トムラウシ、羅臼岳など。残りは西上州、秩父、南会津などの「近い山」。十石峠、ブドウ峠、茂来山、オドケ山、和名倉山、荒海山、七ヶ岳など。

目的の山まで峠を越えて旅する、そして、山から山へつないでひなびた趣がふんだんに残された山村を歩く。宿がなければ民家に一宿一飯の恩義にあずかる、そんな時代に藤島敏男氏や深田久彌氏など気の合った仲間と歩いた山旅、古きよき時代を追体験できる。

山梨県北杜市の宿「ロッジ山旅」

には、1967年から87年までの20年間にわたる望月氏の64冊のアルバムが保存されている。年代ごとに綺麗に整理されており、写真には場所や人物名などこまめに記載されている。本稿を書くに当たって同宿を訪れ、久々にアルバムを拝見したのだが、見開きごとに写真が貼り付かないようデパートの包み紙が挟み込まれており、本書の序文を執筆された藤島敏男氏とはもとより、岡野金次郎氏や横有恒氏にもお目にかかれる。望月氏の交友の深さや、味のある山村風景、道端の道祖神や地蔵様など、どこか懐かしい時代の山旅をここでも垣間見ることができ、資料的にも貴重である。

なお、「付録」の小冊子には、望月氏の山の同行者である加藤泰安氏や坂本直行氏、深田久彌氏、島田巽氏らが小文を寄せており、こちらも興味深い。また、後年出版された『折々の山』(茗溪堂)でも同様の紀行文が味わえる。

本書は、1968年に茗溪堂から出版されているが、現在では絶版となっているため古書店かJACの図書室でお読みいただければと思う。

(図書委員会委員長)

〔48〕『花の百名山』 (田中澄江・文藝春秋)

原邦三

本書は、中高年登山ブームの兆しが見え始めた1980(昭和55)年に文藝春秋より発刊された。月刊誌『山と溪谷』77年1月号から3年にわたる連載をまとめたものである。100編の山と花の紀行が収められ、登山者のみならず、一般人の人々からもエッセイ集として絶大な人気を博した。81年には読売文学賞(随筆・紀行賞)を受賞している。

著者の田中澄江は舞台・映画・ラジオ・TVの脚本のほか、小説・随筆にと多忙な執筆活動に携わるそのかたわら、登山と花をこよなく愛し続けた。登山のきっかけは幼少期に亡くした父親と、東京近郊の山を歩いたことだった。本書の冒頭「高尾山」に、

《おとうさん》 私は小学校一年



昭和55(1980)年初版発行

の夏に死んだ父の面影を、紫紺の山肌の上に描いて、胸に父を呼び、滂沱^{ほうた}として溢れる涙を拭いもやらず、ススキの茂みの中に立ちつくした。とある。

山に行けばお父さんに会える、いつもこの思いを携えて山に登ったと言う。しかし、娘時代には「無限にやりたいこと、ゆきたいところが多く、山ばかりでなく、海でもよく泳ぎ、おいしいものも食べ歩き、音楽会や芝居にも足繁く通った」と活発に過ごした日々を回想する。余暇を山一本に絞ったのは、中年になってからだだった。

本書は幼少期から青春時代、そして中年までに訪れた山々の紀行書であり、著者の登山人生を述懐するエッセイ集でもある。山の選定は関東、東北、北海道、中部および関西以西の山から100山、その基準は高さよりその山が人間の生活にどう関わったかに重きを置く。100の花々は、低山や中級山岳ゆえに高山植物よりも山野草が圧倒的に多く、登場する花々は全編を通して800種に及ぶ。

しかし、各編のテーマは山と花だけにとどまらず、肉親や山仲間への想いがいつも触れられる。同行してくれた地元ボランティアの人々や植物・地学専門家とのやり取りでは、教えてもらう楽しさや面白さを伝え、そして、常に親しみや敬愛、感謝の念を持って接する。

植物学者・牧野富太郎氏と同行したときの思い出では「(前略)思いがけない花を見つけた時など、子供のように息を弾ませ、その名を呼びながら、小走りに駆けよっていかれた。先生のみずみずしい御命は、多分野の花々から、絶えず生き生きと注がれたものではなかるうか」と回想している。また、自然保護活動中に亡くなった平野長靖氏については、濃密な交遊の様子と残念なその死を悼んでいる。火山・造山など自然科学分野の話では、鋭い観察眼で露岩の美しさや、その成分が植物の生育に大きく関わっていることを解説。専門的知識を交え、読者の知識欲を大いに満たす。

一方、著者の専門的分野の古典文学や歴史についての記述は特に楽しく、思わず引き込まれる。関

西における万葉時代の大和朝廷での争いや、関東での戦国大名の抗争など、歴史と関わりのある山々が登場し、歴史上の人物を生き活きとよみがえらせている。一編一編がとても濃い、味わい深い作品である。

筆者は、『山と溪谷』誌掲載時の担当編集者であった。入社1年目に「田中番」を仰せつかった。中野区の田中邸に毎月伺うのだが、漠然とした山の話で盛り上がるものの、次号執筆予定の山と花については一切先生任せだった。それでも連載タイトルを決める段階では私が学生時代に購入した深田久彌著『日本百名山』を思い出し、「花の百名山」を提案したところ、快諾していただいた。

月1回の原稿取りは楽しみであった。先生はともにお酒が好きで、原稿取りの私に「酒饅頭」をこしらえて待ち構えていたことがあった。皮も餡も日本酒の味だけしかなかった。50年以上も前のことだが、その心遣いがとてもうれしかったのを覚えている。

文庫版は、2017年に文春文庫の新装版(税込924円)が出ている。

(図書委員会委員)

東 西 南 北

ウェストンと一葉の記念写真へ」

日本山岳会草創期の写真・中村清太郎名誉会員の遺品から

小原茂延

表題を見た私は少なからず驚かされた。「えっ、ウェストン師と樋口一葉の写真が？ と一瞬あり得ないとは頭の片隅で認識しつつも目を疑ったものだ。このタイトルは安川茂雄が自著『近代登山史』（1969年、あかね書房刊）の付録小冊子末尾に書いた小文の題である。写真は本書の口絵にあるものの小冊子にはないため、先に小冊子を読んで錯覚を起こしてしまった。また、小島島水が文筆家として世に出たのが、当時の文芸雑誌『文庫』に発表した「一葉女史」だった記憶も一因である。

さて、当該写真について安川茂雄の説明を引用略記すると、『ウ



ウェストン夫妻を囲んでの宴席

ェストン夫妻を囲んでの宴席の一葉は、故中村清太郎先生の遺品中より発見され、長男浩太郎氏より貸与された。島水、加賀、三枝、中村ら大半の列席者は判明したが、ウェストン夫人左手の人物が誰か判然とせず、列席者中、ただ一人の現存者(当時)であつた三枝先生に照会したところ、おそらく岡野金次郎翁であろうとの回答を得た。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

岡野はこういった山岳会幹部との宴席につらなる機会はあまりなかったことから探索すると、この写真の撮影された時期は明治45(1912)年3月9日、ウェストンの「日本アルプス講演会」(島水と岡野が通訳を担当 前後ではないか)と推測している。なお、武田久吉博士は渡英中、高野翁はおそらく撮影者だったと想像している。

写真を所有していた中村清太郎は添付写真の右端で、加賀正太郎、三枝守博(威之介)らと東京高商の同期である。山岳会創立間もない入会ながら、赤石山脈探検登山に三枝と参加して、その記録を島水・高頭・高野・三枝と連名で『山岳』第五年第一号(明治43年3月)に「白峰及び赤石山脈縦横記」として執筆している。

この写真が、日本の山岳史をたどる上で大きな意味を持つ一葉の写真であることは言を俟たないであろう。撮影されたのが1912年早々で、『山岳』第七年第一号誌上に講演会は掲載されていたものの、写真はおろか、招待の宴についての記事すら見当たらないのはなぜであろうか。そして、写真を撮影したと思われる発起人の高野鷹

電子版会報「山」への登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知(メール)や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会(internet@jac.or.jp)にお問合せください。

【電子版への登録】
https://jac1.or.jp/kain/
2025040135272.html



蔵ではなく、中村清太郎が所有していたのみならず、彼が存命中に公に発表せず、他界(1967年)した遺品の整理中ハハリと落ちた一葉の写真だったという。実に55年間という長きにわたり陽の目を見なかつたわけで、しかも発起人を含む早期会員10名ほどの参加者がいる催しにおいてである。これは推測ながら、暗黙の裡に封印さ



2025年4月
共同文化社
A4変形判 192頁
2700円＋税

日高山脈は、北の岳人にとって

北海道の脊梁 日高山脈

「北海道の脊梁 日高山脈」
編集委員会編著



図書紹介

れたものではないかとの疑念を抱かざるを得ない。なぜ撮影者であると思われる高野鷹蔵および所有者は所有していなかったのかを含め）はウェストン招待宴の後、速やかに公表しなかったのか理解に苦しむのであるが、諸般のことを考え合わせると当時の人間関係にあったのではないかと推察している。小島烏水がその著『アルピニストの手記』ほかで、山岳会創立前後

のことを回想している中に、あるいは「云報」第3号・昭和5年に寄せた「去つてゆく人々」などで書き伝えている文章で思い当たることがある。それは岡野金次郎と若手会員との間に軋轢が生じ、烏水はその修復に心を砕いていたと読んだことを記憶している。やがて小島烏水が米国駐在となつてほどなく、僚友と離れた岡野金次郎は山岳会を退会、去りゆく人となつた。（資料映像委員会委員・埼玉支部）

特別な存在である。憧れだ。その険しさに、奥深さに、美しさに憧れる。体力と技術、時間と情熱をふんだんに注がなければ、その魅力に浸ることは許されない。南北約150kmにわたるこの山脈の中で、登山道がある区間はごくわずか。それも本州の登山道のように整備が行き届いているわけではない。主稜線には営業小屋は

おろか、避難小屋すらない。麓にいくつかのダムや山小屋があることを踏まえても、国内で最も原始的な自然環境が残された秘境の一つだ。

そんな日高山脈が、2024年6月、国立公園に指定されることとなった。「日高山脈襟裳十勝国立公園」。大雪山国立公園を抜いて国内最大の面積を誇るという。本書はこれを機に刊行された一冊である。日高を愛した先人たちのエッセイ集に始まり、地質と地形に高山植物、日高開拓に心血を注いだ北大スキー部と山岳部の登山史へと続く。

その後は、季節を問わない日高登山の魅力、山岳古道の現状や、麓から見た山と人々の営みなど、項目が多岐にわたり読者を飽きさせない。特筆すべきは鮮やかな写真の数々だろうか。四季折々のカラー写真を眺めていると、思わず登山意欲をかき立てられ、今度はあの山へ登ってみたい、と思わせてくれる。

そんな中で、私は一つの見出しで目が留まった。「頓挫した日高横断道路計画」。1984年に着工し、総額500億円以上を投じた

が、03年に事実上の計画中止が宣言された、あれである。

賛否両論あるかもしれないが、ひとりの岳人として、この道路が完成しなくて良かったと思う。

日高の魅力は、なんと言つてもその山深さだ。昨今もてはやされがちな軽装登山は、日高においては似合わない。人気も道標もない山稜を泥臭くかき分けてこそ日高なのである。道路が完成していたら、今よりも格段にアクセスが容易となり、その分、開拓が進んでしまったに違いない。それでは日高の魅力は半減してしまうのだ。あの計画と同じ懸念の種を、国立公園化に感じてしまつては本末転倒のはず。目指すべきは人と自然の共生だ。

知名度が上がり人気となれば、オーバートーリズムとなるのが近年の流れである。山が荒れ、商業施設が立ち並び、人でごった返す日高を僕は見たくない。

10年前、雪山一年生のころに、先輩に連れられ登つた日高の山並みが忘れられない。1月下旬、野塚岳の山頂から望んだトヨニ岳は、純白の雪をまといオオワシのように翼を広げていた。雨合羽で登

った最初の日高に魅せられ、私は登山にのめりこんだ。

その後も、沢の継続遡行、春の単独日高山脈全山縦走、北海道分水嶺縦断行と、幾度となく日高の懐へ入り込んできた。日高山脈が魅力的な場所のまま後世へと受け継がれていくことを願ってやまない。

そして、本書は日高山脈の歴史と現状と、守るべき魅力を教えてくれる、読み物としても資料としても貴重な一冊である。

(北海道支部・野村良太)

荻田泰永著

君はなぜ北極を歩かないのか



2024年11月
産業編集センター
B6変型判
1600+税

小田急線桜ヶ丘駅の改札口を左に進み、階段を降りると中心に大きな桜の樹を囲む明るく開けたロータリーに出る。半周すると小さなビルの入り口に「冒険研究所書店」と書かれた、見過ごしてしま

図書受入報告(2025年5月 6～8月分は次号に掲載します)

著者	書名	頁／サイズ	発行者	発行年	寄贈／購入別
辰野勇	自然に生きる：不要なものは何ひとつ持たない／角川新書	208p／18cm	KADOKAWA	2025	著者寄贈
清水敏一	大雪山研究会：大雪山研究と開発のバイオニア	272p／22cm	北海道出版企画センター	2024	出版社寄贈
山と溪谷社 編	北アルプス 南部：大きな地図で見やすいガイド	112p／26cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
山と溪谷社 編	北アルプス 北部・白山：大きな地図で見やすいガイド	112p／26cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
平塚市博物館・平塚人物史研究会 編	近代ひらつかの女性たち：2024年度春期特別展	120p／30cm	平塚市博物館	2025	個人寄贈
芳野菊子	歌集 旅の空：短歌で綴る海外紀行	205p／20cm	ながらみ書房	2025	著者寄贈

いような入り口がある。狭い階段を2階に登ると30坪ほどのスペースに極地用装備と1万冊以上の書籍が所狭しと並んでいる。書店とイベントスペースと事務所を兼用した北極冒険家・荻田泰永の活動拠点である。

1977年生まれの荻田は北極を中心とした冒険家として知られているが、世にイメージする冒険家とは違い、ごく普通のどこにでもいそうな人物で、サラリーマンか学校の先生のような印象を受ける。とてもブリザードが吹き荒れる北極のマイナス50度Cの厳しい

会報「山」総目録が完成

このほど会報901号（令和2年6月号）から950号（令和6年7月号）までの目録が完成いたしましたので、データを公開いたします。編集者の労作ですので、ぜひご利用ください。

なお、紙による印刷版の目録をご希望の方は、事務局にお申込みください（印刷送料として400円。切手払いでも可）。よろしくお願いいたします。

（事務局・豊泉）

自然を相手にする人を想像させない。私自身、荻田と何度か会って接してきているが、やはりその印象は今も変わらない。

さて、荻田と北極との出会いは22歳のときに遡る。大学3年のとき中退して、アルバイト生活で実家暮らし。やるべきことを見失い、満ち溢れるエネルギーを持て余していたとき、偶然、テレビのトーク番組で冒険家・大場満郎の存在を知る。

悶々としていた荻田の目には、足の指全でと手の指2本を失つても、北極へのエネルギーを傾ける大場の生き方が輝いて見えた。それまで海外旅行もアウトドアの経験もない荻田だったが、導かれるように大場に宛てた手紙をきっかけに、2000年4月から9名のメンバーの一員として「北磁極を目指す冒険ウォーク」に参加することになる。

それ以後、毎年のように北極に通いのめり込み、荻田の冒険行は邁進していく。荻田は大場との冒険ウォークを常に頭の片隅に抱きつつ経験を重ねていき、18年、日本人として初となる南極点へ徒歩による無補給単独踏破に成功する。

その南極での行動中、次は自分が若者たちを連れて北極を歩こうと計画し、アイデアを育てる。

帰国後、かつての大場と同じように講演会や出演したラジオ番組でその計画を話すと、参加を希望する若者たちから申込みが次々とあった。19から26歳の若者12名が集まったが、なかには当時の自分と同じようにアウトドア経験も運動部経験もない女性も含まれていた。カメラマンを加えた14名の隊は、2019年4月7日、バフィン島のパンゲニタングを出発し、35日間をかけて700kmを走破して、無事に5月5日、クライドリバーに到着する。

本書『君はなぜ北極を歩かないのか』は、荻田が大場をきっかけとした北極との関わりに始まり、この若者たちとのバフィン島の計画から準備やトレーニング、そして冒険行動が記されている。若者たちと行動をとるにすぎなだけで、かつて荻田が北極の体験で得たことを自身も振り返りながら、20年間の経験を重ねた立場から若者を導いていく。ときには後方から彼らを見守り、ときには荻田自身も感情を露わにして厳しく叱責しながらも、北極の厳しい自然と人間が対峙する術を伝える。非日常の逃げ場がない環境で互いの生身をおつけ合い、35日間という苛酷な長期間の行程は、若者たちにとって貴重な経験と財産となっていく。付記には参加者の5年後のそれぞれの想いの言葉が綴られている（荻田に聞くと今も定期的に彼らと交流があると言う）。

書店を営むほど読書家の荻田は、極地探検の歴史や登山関係の史実にも精通し、店内には冒険本はもとより哲学書や社会学や人類学など多様なジャンルの書籍が並ぶ。本書にも荻田が冒険について様々な視点から思考する文章も散りばめられているのも興味深い。同世代の冒険家として角幡唯介と並び、内省する冒険家として今後の活動と著述に大いに期待したい。

荻田泰永の著書には、ほかに第9回梅棹忠夫山と探検文学賞『考える脚』（KADOKAWA）、『北極男・増補版』（山と溪谷社）、『書店と冒険』（生活綴方出版部）、第28回日本絵本大賞『PIHOTEK』文、荻田泰永／絵井上奈奈（講談社）がある。

（保科雅之）



令和7年度第5回(7月度)理事会 議事録

日時 令和7年7月10日(木) 19時

00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン

(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・飯田・柏各副会長、原田・猿渡・荒川各常務理事、望月・池田・吉田・大塚・梅田・根本・片山・武川各理事、石川・額賀各監事

【オブザーバー】節田会報編集人、長島事務局長(書記)

【審議事項】

1・令和7年度前期海外登山助成登山隊について(柏)

立教大学山岳部ネパール・ピサンプイク、沢極儼のニュージールランド南アルプス山脈ハースト川流域を承認した。(賛成15、反対0)

2・山陰支部長の交代について

(原田)

白根一会員から伊澤寿高会員への支部長の交代を承認した。(賛成15、反対0)

3・医療委員会委員長の交代について(原田)

橋本会長から原田常務理事への委員長交代を承認した。(賛成15、反対0)

4・公益法人運営委員会の解散について(望月)

会を取り巻く諸環境の変化に伴い公益法人運営委員会を解散することを承認した。今後は弁護士、行政書士などメンバーを刷新した法務委員会(仮称)に引き継ぐ予定。

(賛成15、反対0)

5・山研電力メーター情報発信サービス申請(原田)

山研における電力使用状況のデータ収集の目的で中部電力と標記の契約(無償)をすることを承認した。(賛成15、反対0)

6・令和7年度支部助成金および新入会員報奨金の送金について(猿渡)

令和7年度支部助成金会員1名当たり20000円、新入会員獲得報奨金1名40000円(ともに前年同額)を支給することを承認した。(賛成15、反対0)

【協議事項】

1・2025～27年の主たる目標について(永田)

新体制でのスタートに当たって理事会が取り組むべき事項が提示された。各項目についていつまでに誰が行なうかということを決めて取り組むことが確認された。

2・全国山の日協議会からの寄付の依頼パンフレットの取り扱いについて(原田)

全国山の日協議会から「入会と寄附のお願い」のパンフレットの配布を依頼された。ルーム窓口に置くこととした。

3・イベントなどのPRのお願いについて(永田)

日本山岳会の活動を広く一般に知ってもらうためプレスリリース配信サービス「PR TIMES」に登録しているが、支部などで開催さ

れるイベントについても積極的に公開していくように登録テンプレートを用意した。岩手支部が開催する古道「沢内街道白木峠」の日帰りハイキングの登録事例の紹介があった。

4・役員交代に伴う挨拶状送付先について(事務局)

事務局から役員交代の挨拶状の送付先の確認があった。

5・支部移動にかかる手続きの簡素化について(事務局)

支部の移動を希望する手続きについて、書類による提出からホームページでのフォーム入力も可能にし、本部へ提出するような形にする検討依頼があった。移動希望が提出された後、関係支部に本部から連絡する。

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

2・同好会「山げらの会」解散について(吉田)

3・ホームタウンちよだ応援事業の指定団体の決定について(永田)

千代田区への寄附事業の対象として、「初心者向け登山講習会」が採用された。当該事業が指定された寄附に対して補助金が交付され

る。

4・海外登山報告会で使用した芝浦工大の会場費追加請求について(永田)

【その他】

1・「山」7月号の進捗状況について(節田)

2・事務局連絡

ルーム目誌 7月

- 1日 広報委員会 スケッチクラブ
2日 山行クラブ
3日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理クラブ
4日 国際交流PJ 入会説明会
6日 記念事業委員会(コーカサスの桜)
7日 国際委員会
8日 フォトクラブ
9日 財務委員会 かつばの会
10日 理事会
11日 図書委員会 自然保護委員会
14日 総務委員会 アルパインスキークラブ
15日 麗山会 沢登り同好会Ⅱ
16日 自然保護委員会 東京支部 アルピニズムクラブ 山遊会

17日 科学委員会 学生部

18日 クニ塾

19日 アルピニズムクラブ

23日 子どもと登山委員会

24日 学生部 みちのり山の会

28日 YOUTH CLUB委員会

29日 記念事業委員会(引き継がれる山岳祭)

30日 総務委員会(引き継ぎ) 東京支部 緑爽会

31日 総務委員会(引き継ぎ) 7月来至者 252名

会員異動

物故

二木節夫(5335) 24・7・27

佐伯郁夫(5794) 25・7・24

下山 壽(6471) 25・7・1

山本矢須登(15304) 25・7・19

退会

遠藤栄子(11149) 山陰

佐野武士(12434) 東海

増井えみ子(12861) 東海

奥岡 修(16194) 東海

石橋秀幸(A0602) 広島

藤戸大樹(A0632)

I N F O R M

インフォメーション

A T I N

◆「私のパミール・残された高峰」

講演会 パミール・中央アジア

研究会/日本山岳会学生部委員会

中央アジア、パミールのイスモ

イル・ソモニ(旧コミユニズム)峰

など7000mを超える3峰は知

られているが、イステイグロイ峰

(6940m)以下の魅力的な高峰

群の存在はあまり知られていま

ん。講演者・角張氏は1974年

新潟大学パミール登山隊でレー

ン峰に挑み、ワハン回廊にそびえ

るマヤコフスキー峰(6095m)

やパミール各地の山々を登り歩

ています。

角張氏の見た、パミールに残さ

れた高峰群を広く紹介するため講

演会を開きます。

日時 10月16日(木) 18～20時

会場 104室

主催 パミール・中央アジア研究会

共催 (公社)日本山岳会 学生部

委員会

講演者 角張嘉孝氏(静岡大学名

誉教授、中央アジア森林草

地保全研究所代表理事)

問合せ パ中研事務局・本間 ☎

090・4390・1032

◆探索山行「箱根火山の活動史と今を知る」 科学委員会

現在の箱根火山の地形ができて

きた歴史と最近の活動と温泉造成

法、温泉卵のでき方の見学と学習

および金時山登山(予定)。

日時 10月20日(月)～21日(火)

集合解散 小田原駅西口10時集合、

18時解散

講師 萬年一剛(神奈川県温泉地

学研究所)

宿泊 箱根太陽山荘(有形文化財)

募集人員 35名(先着順)

経費 約2万5000円(バス、現

地交通費、宿泊費ほか)

申込み締切 9月30日(火)

申込み・問合せ 木曾雅昭 ☎

kagaku@jac.or.jp 氏名(ふ

りがな)、性別、生年月日、

会員番号、住所、電話番号
を明記。

*申込み者に詳細を連絡します。

◆いいとこ歩き遍路プラス ④香川 山行クラブ

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ちで良い所を歩き、プラスを楽しみます。4回目は、75番善通寺から88番大窪寺まで順打ちします。

日程 11月17日(月)～11月20日(木)

3泊4日

集合

17日JR善通寺駅改札口12時10分。夜行バスで到着、新幹線あるいは前泊。

行程

17日 75番善通寺―宇多津(泊) 18日 79番天皇寺―80番国分寺(泊) 19日 83番一宮寺―長尾(泊) 20日 88番大窪寺―1番寺―霊山寺―板東駅(17時解散)

歩程 1日1～6時間(やや健脚)

費用 参加費2万円(タクシー、通信費など)、1日約1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)。傷害保険は各自。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 11月7日まで 数見直

☎090・7204・4668
✉sumi8t@gmail.com

◆「雪崩から身を守るために」講演会

雪崩事故防止研究会

雪崩事故防止研究会では、これまで全国で「雪崩から身を守るために」講演会および「雪崩サーチ&レスキューAvasAR講習会」を開催。本年は全国5ヶ所で開催しますが、今号では札幌と大山での開催をご案内をいたします。

●札幌 第33回講演会「雪崩から身を守るために」2025

日時 10月25日(土) 10～18時

会場 北海道大学高等教育推進機構大講堂(定員450名)

共催 北海道大学体育会山スキー部ほか

講演 「雪と雪崩の科学」山口悟

「スキーガイドの行動学」塚原聡、「降雪と気象」中村一樹、「雪崩の搜索と救助」阿部夕香、「雪崩の搜索・救助に必要な医学的知識」浅井悌、ビデオメッセージ三浦雄一郎

講習

「北海道防災航空隊による

雪崩事故現場におけるエアレスキュー」齋藤昇(北海道防災航空隊長)、

●大山 第2回大山講演会「雪崩から身を守るために」2025

日時 11月15日(土) 10時～17時30分

会場 鳥取県大山町・大山総合体育館(定員200名)

主催 雪崩事故防止研究会

講演 「雪と雪崩の科学」勝島隆史、「降雪と気象」中村一樹、「雪崩のリスクマネジメント」大西人史、「山岳ガイドの行動学」笹倉孝昭、「雪崩の搜索と救助」阿部夕香

「雪崩事故の医学」及川欧問合せ 雪崩事故防止研究会代表

・阿部幹雄 ☎090・3118・1929 ✉mabe@seagreen.ocn.ne.jp 【事務局】〒064・0921 札幌市中央区南21条西8丁目1・37 (株)石田商店内 ✉ask@assh1991.net

●緑爽会創立30周年記念講演会のお知らせ

日本山岳会は間もなく創立120周年を迎えます。創立後は主に発起人の7人が知人を誘う形で会

員募集が始まり、最初の1年間で約400人の入会者がありました。その中には小山内薫、志賀重昂、牧野富太郎、島本赤彦、田山花袋、島崎藤村、與謝野鉄幹といった著名人が名を連ね、山を趣味とする集まりとは思えない多彩な会員を擁しているのスタートとなりました。長年にわたって、それらの会員がどのような経緯と動機で入会したのかを調べてきた成果を、南川会員が紹介いたします。

演題 「創立間もない山岳会に彩りを添えた人びと」

講師 南川金一会員

日時 9月25日(木) 13時～16時

会場 ルーム104号

定員 40名(事前に左記宛お申込みください)

申込み先 荒井正人 ☎090・7719・7855

✉masatonyama@gmail.com

◆第32回展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

2025年度は、2つの会場で開催します。国内、国外の山で四季折々に撮影した全紙作品39点を展示します。

【第1回】

会期 8月19日(火)〜24日(日) 10時
 18時 最終日は16時まで
 会場 J C II クラブ 25 東京都千
 代田区一番町25 J C II ビ

ル地下1階
 ☎ 03・3261・0300
 URL: <https://www.jcii-cameramuseum.jp>

第41回 図書交換会開催と出品図書募集のお知らせ

図書委員会では、来年3月初旬に、ルームにて図書交換会を行なうことといたしました。本来なら手に取って申込みしていただくのが最善ですが、年次晚餐会とは異なる日にルームで開催するため、遠方会員の皆様にお越しいただくのは難しいかと思えます。その点は申し訳なく思いますが、申込みは郵送やファックス、メールでできますので、ぜひご参加ください。

つきましては、会員の皆様に交換会に向けて、お手持ちの書籍の出品をお願いいたします。皆様の周りに処理に困っている書籍、書棚で眠っている書籍があるのではないでしようか。山岳書の散逸を防ぐことが大切な今、図書交換会はその有効な手段の一つでもあります。ぜひご協力をお願いいたします。

出品に当たつての注意点は以下のとおりです。

*お名前、会員番号を明記し、「日本山岳会図書委員会」宛にお送りください。締切は10月10日



masatoryama@gmail.com

●問合せ先 図書委員会委員・荒井正人

☎ 090・77719・7855

すでに会員のご遺族から寄贈図書が届いており、なかなか手に入らない書籍を廉価で購入できる良い機会になると思います。多くの会員からの出品協力をお待ちしています。

*受け入れた図書リストを「山」11月号やHPに掲載し、ご希望図書のお申込みをしていただくスケジュールです。そして、開催当日来場された会員のお申込みと合わせ、複数申込みとなった図書は抽選で購入者を決定いたします。

ただし、雑誌類は出品対象外です。送料は、大変心苦しいのですが、ご負担をお願いいたします。なお、山岳会図書室に収蔵されていない図書は図書室で受け入れさせていただきます。
 *本の収益は、発送などの経費を除いて山岳会に寄附いたします。

東京メトロ半蔵門線・半蔵門駅4番出口から徒歩1分
 【第2回】
 会期 10月7日(火)〜13日(月) 8
 17時 *最終日は15時終了

会場 東京都「TAKA O599 MUSEUM」 ☎ 042
 ・665・6688 京王
 線・高尾山口駅から徒歩約4分

問合せ 田口克彦
 ☎ taguchi@myglobe.ne.jp
 ☎ 090・8034・2003

花澤廣巳 ☎ hnzwa-hirimi@xg8.
 so-net.ne.jp ☎ 090・782
 7・0155

◆日本山岳画協会展 〈モンベル展〉―山に魅せられた画家達―

山に魅せられ、こよなく山を愛する画家たちの集団です。

日時 9月6日(土)〜15日(月) 10時

30分〜21時(初日は13時から) 11時から16時には会員の当番がおります。

会場 モンベル御徒町店4Fサロ

ン(〒110・0005

東京都台東区上野22・5

コムテラス御徒町 ☎ 03・

5817・7891)

◆編集後記◆

●今年の夏山は、横尾から蝶ヶ岳に遊んできました。それにしても、徳沢―横尾間の梓川左岸道の変貌ぶりにびっくりです。名所の新村橋は撤去(永久橋に替わる)され、現在の歩道の左手に、新しい車道の砂盛りができていました。自然にも人の手が加わると、「生流転」「有為転変」するは世の習いとはいえ、殺伐とした風景でした。

●生涯、ぼぼ穂高ばかりを撮り続けた山本和雄さんという山岳写真家がいきました。涸沢などへの道すがら山本スタジオと呼ばれた撮影ポイントで、よく解説してもらったものです。そのスタジオが壊滅状態でした。ただ、徳沢出合上流の化粧柳の横綱と呼ばれた大木は健在のようで、それだけが唯一の救いでした。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 963号

2025年(令和7年)8月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
 編集人 節田重彰
 Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社